

第Ⅵ章 結 語

以上、奈良県桜井市吉備に所在する吉備池廃寺について、1997～2001年の5年間にわたる学術調査を中心に、その成果を詳述してきた。これらの発掘調査により、当初は瓦窯と推定されていた本遺跡が、7世紀の巨大な寺院跡であることが判明し、古代史上の大きな発見として注目を集めたことは記憶に新しい。本書では、調査およびその後の検討成果を正式に報告するとともに、そこから導かれるいくつかの問題にも論及したが、以下、それらの内容を要約し、今後の課題についても触れておくことにしよう。

1 遺 構

金 堂 金堂は、約1mの深さの掘込地業をおこない、東西37m×南北25mほど、復元高2m以上の巨大な版築基壇を築いている。基壇南辺の一部は南へ張り出す。また、基壇の外周には、底に石を入れた溝をめぐらし、掘込地業内からの水とともに西方へ排水したらしい。礎石は遺存せず、それにかかわる痕跡も確認できないが、基壇の実長および縦横比から、桁行7間×梁行4間の建物を想定することができる。この外側に、さらに裳階がつく可能性もある。基壇外装についてはまったく痕跡がなく、遺構の状況などから、木製の壇正積基壇を想定した。塔および中門・回廊についても同様の構造と考えておく。なお、基壇の東辺では砂利敷を確認しており、本来、基壇外はこうした舗装がほどこされていたものとみられる。

塔 金堂の西方に位置する塔は、掘込地業をとまわず、整地土の上に版築を重ねて、一辺約32m、復元高2.8mの巨大な基壇を築く。基壇の中央部には大きな心礎抜取穴が残り、心礎は、上面が基壇上に出る地上式であったと考えられる。また、基壇の西辺では、版築の途中で心礎を運び上げるためのスロープの存在を確認した。心礎以外の礎石やそれに関わる痕跡は残っていないが、想定される心礎の大きさから、四天柱は心礎上に立てた可能性が高い。基壇の規模は、飛鳥時代のほかの寺院はもちろん、奈良時代の東大寺七重塔をもしのぎ、文武朝大官大寺や新羅の皇龍寺の九重塔に比肩する。吉備池廃寺の塔も九重塔と考えてよいだろう。初重平面は、方7間、11尺（1尺=0.300m）等間と推定する。

中門・回廊 中門基壇は削平され、周囲の雨落溝から、東西12.0m×南北9.8m程度の基壇と推定される。桁行3間×梁行2間の切妻造八脚門であろう。ただし、中門の位置は、金堂心から西へずれており、この点から、金堂と塔それぞれに対応して、二つの中門が存在した可能性が想定される。また、回廊は南面および東面・西面回廊を確認し、基壇幅5.4m、梁行11尺と復元できる。東西の回廊間の距離は外側柱列間で156.2mあり、440大尺（1大尺=0.355m、以下同じ）として設定されたとみてよい。回廊で囲まれた空間は広大だが、中門や回廊自体は、金堂・塔にくらべると意外に小規模といえる。これは、先に想定したような二つの中門をもつ配置とも

関わるかもしれない。

僧 房 金堂の北方とその西で、掘立柱の僧房3棟を確認した。いずれも梁行2間の規模をもつ東西棟建物で、今のところ、発掘で確認した国内最古の僧房遺構となる。南北に並ぶ2棟のうち、SB340は桁行11間、SB400もそれと西妻をあわせた桁行9間（推定）の細長い平面をもつ。低い床を張り、内部を仕切って使用したのだろう。SB400北側柱列から南面回廊外側柱列までの距離は、東西回廊間と同じく440大尺である。こうした計画的な配置や、金堂および伽藍全体の中軸線との関係から、多数の僧房が展開していた状況が想定できる。形態的には8世紀の僧房と異なる点が多いが、僧房の発展過程を知るうえで貴重な資料といえよう。

寺域と伽藍配置 吉備池廃寺関係の遺構の広がり、南北260m×東西180m以上におよぶ。伽藍中心部は、南面する金堂と塔を東西に並べた、いわゆる法隆寺式伽藍配置をとり、その最古の例となる。堂塔の配置は大尺で計画され、原則として回廊の外側柱列を基準に、10尺単位の完数で設定された。金堂心および塔心は、東面・西面回廊からそれぞれ100大尺、金堂心は南面回廊から150大尺の位置に置かれている。回廊で囲まれた中枢空間は東西に細長く、その東西規模は同時代の国内寺院をはるかに超え、新羅皇龍寺に匹敵する。また、金堂と塔の間隔も心々間240大尺とひじょうに大きいのが特徴だが、これは塔の高さに由来する可能性がある。講堂と北面回廊の遺構は確認できなかったが、大規模な整地や瓦の出土状況から、その存在は確実視できる。伽藍の完成度はかなり高かったとみてよい。

廃絶後の遺構 吉備池廃寺が廃絶したのち、一帯は藤原京の京域に含まれ、条坊が施工された。発掘調査では、三条大路と三条条間路の側溝のほか、宅地の塀や建物、区画溝などを検出している。そして、平城遷都後は条里制が施行され、水田化していったものと考えられる。なお、出土瓦からみると、11世紀前半頃、付近に小規模な瓦葺仏堂が建てられたらしい。

2 遺 物

軒 瓦 軒丸瓦4種類（ⅠA、ⅠB、Ⅱ、Ⅲ）、軒平瓦3種類（ⅠA、ⅠB、Ⅲ）が出土したが、平安時代のⅢ型式（軒丸瓦4点、軒平瓦2点）を除くと、ほとんどが創建時の単弁八弁蓮華文軒丸瓦（ⅠA42点、ⅠB23点、種別不明25点）と型押し忍冬唐草文軒平瓦（ⅠA12点、ⅠB1点）にかざられる。葺き替え用の瓦はまったくなく、出土点数自体も、そこで命脈を絶った寺院のものとしては僅少である。比較的短期間のうちに、別の場所へ移建されたことは確実であろう。吉備池廃寺から出土するのは、そのさいに遺棄された再用不能の瓦と考えられる。軒丸瓦ⅠA・ⅠBは、様式上、643年に造営が始まった山田寺金堂の所用瓦より若干先行する要素をそなえている。一方、軒平瓦ⅠA・ⅠBは、斑鳩寺（法隆寺若草伽藍）の軒平瓦213Bの施文型を使用しており、型の傷の状態から、斑鳩寺に後出することが判明している。したがって、創建軒瓦の年代は、ともに630年代から640年代初頭と判断してよい。なお、軒丸瓦ⅠA・ⅠBの範は、その後、楠葉平野山瓦窯へ運ばれて四天王寺の瓦生産に使用され、ⅠBの範はさらに海会寺の創建瓦生産に用いられた。四天王寺のこれらの瓦は、孝徳朝の難波遷都にともなう伽藍整備に関連する可能性が高く、上記の年代観を補強するとともに、この時期における四天王寺と吉備池廃寺の位置づけを示唆している。

丸瓦・平瓦 総計2,649.4kg（丸瓦576.1kg、平瓦2,073.3kg）が出土した。丸瓦の99%以上は、玉縁部までである一木の模骨を用いて製作された創建丸瓦1類。これと組む厚手の創建平瓦1類は、平瓦全体の約90%を占める。残りの平瓦のほとんどは薄手の平瓦2類だが、それに対応する丸瓦は存在せず、近接する安倍寺創建時の平瓦がもたらされたものと推定した。平瓦1類と2類の比率を9:1と仮定し、丸瓦および平瓦の総重量をそれぞれの個体重量で割って完形品の数量に換算すると、丸瓦と平瓦の個体数比は、1:2.62~3.34と算出される。これは、総瓦葺の建物に使われた瓦としてごく妥当な数値である。また、吉備池廃寺の瓦の出土量は、全体では100㎡あたり68.3kgだが、金堂周辺（282.2kg）のように、その数倍に達する部分も存在する。一方、飛鳥藤原地域の古代寺院では、100㎡あたり1tを超える瓦が出土しており、吉備池廃寺に近い状況を呈するのは藤原宮中枢部である。そこでは、100㎡あたり200kg台から300kg台という数値で、これが、平城遷都にともない、屋根瓦の大半が移送された結果を示していることは確実である。吉備池廃寺も同様に、瓦葺建物が存在し、移建されたものと推断する。

土器 整理用木箱で82箱分が出土したが、小片が多く、良好な資料は少ない。吉備池廃寺創建にともなう整地土には飛鳥Ⅰの土器が含まれ、金堂基壇の掘込地業や基壇外周の溝から出土する土器も、時期が判明するものは7世紀前半までにおさまる。これらは年代の上限を示すものだが、吉備池廃寺の創建もほぼそれに近接すると考えてよいだろう。僧房の柱掘形に含まれる土器も同様の年代を示す。一方、塔心礎抜取穴からは7世紀後半の土器が出土しており、廃絶の時期をうかがわせる。また、回廊の雨落溝や僧房の柱抜取穴には、飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が含まれていた。このほか、藤原京期から奈良時代、さらに平安時代以降の土器がある。

創建以前の遺物 吉備池廃寺に先行する遺物としては、サヌカイト製のナイフ形石器や剥片、石核、石鏃のほか、太形蛤刃石斧などが出土している。いずれも遺構にはともなわないが、早くからこの一帯が生活の場となっていたことがうかがえる。また、調査地のほぼ全域にわたって、円筒埴輪33点と家形埴輪・蓋形埴輪計7点が出土した。伽藍北方から南東にのびる小丘陵上に古墳が存在したものと推定される。このほか、僧房周辺から、埴塼やとりべ、鉄滓、焼土、砥石がまとまって出土し、冶金関係の工房が先行して存在したことを示している。

3 吉備池廃寺と百済大寺・高市大寺

吉備池廃寺の寺名 以上のように、吉備池廃寺は、630年から640年代初頭に創建され、やがて別の場所へ移転した寺院と考えられる。発掘調査で明らかになった金堂・塔および伽藍の規模は、同時代の国内寺院をはるかにしのぎ、新羅の皇龍寺や文武朝大官大寺に近い。これらが国家の大寺として建立されたように、吉備池廃寺も天皇（大王）の発願によるものとみてよいだろう。すると、年代とあわせてそれに合致するのは、百済大寺しかない。百済大寺は、『日本書紀』や『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』がともに639年の創建と記す、舒明天皇発願にかかる最初の勅願寺である。着工後ほどなく舒明は死去するが、皇后であった皇極天皇が造営を引き継ぎ、孝徳朝（645~654）にはある程度寺観を整えつつあったらしい。その後も、彼らの子である天智天皇が、のちに大安寺金堂本尊となる乾漆の丈六仏などを施入しており、造営は比較的順調に進展したようである。また、百済大寺は、673年に高市の地へと移されて、高市大

寺となった。この点でも、吉備池廃寺の遺構や遺物が示す状況は、史料とよく符合している。なお、『日本三代実録』から、百済大寺は「十市郡百済川辺」に所在したことが知られるが、吉備池廃寺の南を流れていた現在の米川が、「百済川」に該当することは確実と考える。そのほか、『万葉集』に見える香具山宮から城上殯宮への経路などとあわせて、吉備池廃寺が百済大寺であることは間違いないだろう。

百済大寺の意義 はじめて天皇家の寺として創立された百済大寺は、蘇我氏の氏寺である飛鳥寺に対する対抗意識の産物でもあった。飛鳥寺をはるかに凌駕する九重塔は、その象徴にほかならないであろう。また、そうした建立の背景には、大陸から帰国した留学生や僧侶の存在が関係していた可能性が高い。とりわけ、隣国の新羅で645年に完成を迎える皇龍寺九重塔の情報は、当時の日本にとって、きわめて重大な意味をもっていたはずである。百済大寺の創建が、そうした東アジア世界の情勢とも不可分の関係にあったことは想像に難くない。

高市大寺の所在 百済大寺を「百済の地」から「高市の地」へ移建したのは、天武天皇の宮室であった飛鳥浄御原宮との関わりによるとみられるが、その後、高市大寺は677年に大官大寺へと改称され（天武朝大官大寺）、文武朝（697～707）にはさらに別の大伽藍が造営された（文武朝大官大寺）。高市大寺の正確な所在は未確認だが、『日本三代実録』には「高市大官寺」の旧寺地として高市郡夜部村の田が見え、両者はごく近接した位置関係にあったことがうかがえる。一方、『類聚三代格』には、文武朝大官大寺の西方、飛鳥川との間にも寺地を有していたことを示す史料がある。そこは路東二十八条三里「高市里」にあたり、一帯には、平城京の大安寺と共通する四重弧文軒平瓦など、文武朝大官大寺より古い瓦が分布している。高市大寺は、この「高市里」に所在した可能性が大きい。

4 今後の課題

以上、吉備池廃寺の発掘調査によって明らかになった事実は数多いが、一方で、今後に残された課題も少なくない。

金堂・塔の平面 まず、伽藍中心部でも調査の対象となったのはごく一部に限られており、主要堂塔についても、面的に広くその様相を明らかにするには至らなかった。金堂・塔もトレンチ調査のため、本書で復元案を示した建築平面は推定による部分が多い。礎石に関わる痕跡や足場穴などの確認を含めて、一定の面積を確保した発掘調査により、柱配置その他を解明することが望まれる。また、基壇外装をはじめとする細部の構造についても、遺構に関わる具体的な資料を積み重ね、さらに検討する必要がある。

中 門 本書では、金堂の南で確認した中門の心が、金堂心より西に偏していることなどから、塔の南方にも、それに対応するもう一つの中門の存在を想定した。これらは、南面回廊をほぼ2:3:2に内分する位置に相当し、西側の中門の想定地の大部分は、二つのトレンチには含まれた未調査地にあたるが、遺構としては検出していない。想定の当否を確認するためにも、今後の発掘調査は不可欠だろう。

講堂と北面回廊 講堂および北面回廊に関しては、今回、遺構として捉えることができなかった。吉備池内をはじめ、すでに削平を受けている地域が大半とみられるが、吉備池の堤防下や

水田など、確認される可能性を残す部分も皆無ではない。かりに、遺構自体は消失したとしても、遺物やその分布状況から得られる情報は伽藍の復元にとって有用であり、実態の把握に向けて調査を継続することが肝要である。とくに、北面回廊の位置と、それが講堂へとりついていたかどうかは、大きな問題となろう。

東面・西面回廊 東面および西面回廊は、それぞれ1ヵ所で検出したにすぎず、しかも片側の雨落溝を確認したにとどまる。推定した回廊規模を含めて、正確な位置や形態を確かめるための調査が必要である。

南門と外郭施設 中門の南方で検出した2条の東西溝は、南門の雨落溝となる可能性も否定できないものの、いくつかの疑問点があり、本書では性格の特定を避けた。寺域の南限にかかわる蓋然性は高いが、この間を道路とみるのも一案であり、遮蔽施設の存在を想定することも不可能ではない。また、中門の位置が、金堂心から西（伽藍全体の中軸線寄り）に偏している点から、南門は中軸線上に存在したと考えることもできるだろう。いずれにしても、寺域を限る外郭施設が何一つ明確になっていない現状では、これ以上の推定を重ねても意味は乏しい。今後、門を含めた外郭施設を確認し、寺域を確定することが急務である。

おわりに 一連の発掘調査の成果をうけて、吉備池廃寺は、2002年3月19日に国の史跡に指定された。今後、上記の課題をはじめとして、さらなる内容解明のための調査研究と、史跡の公有化ならびに整備・活用にむけての計画が進められていくことになるだろう。しかし、一方で、近年の宅地開発の波は遺跡中枢部の間近にまで迫り、僧房や南外周部など、調査後に宅地化されてしまった部分も少なくない。とくに、遺跡への主要なアプローチとなりえた中門南方での住宅建設は、痛恨のきわみである。吉備池廃寺の調査は、いまだその緒に就いたところにすぎない。その意味でも、周辺部の追加指定を含めた遺跡全体に対する厳重な保護と、学術的視点に立った計画的な発掘調査の継続を強く望みたい。



Fig. 120 間近に迫る宅地開発（金堂土壇から南方を見る、2003年1月撮影）